日本文學の泰西紹介一斑

教授　高木市之助

委員からの御請求もあり何か書きたいと思つて居る矢先、丁度ポーター氏の英譯徒然草と同土佐日記とを拜措する事が出來た。讀んで見ると非常に面白い。そこでふと心に浮んだのは、一体日本文學（主として古い文學）は泰西の人々に、どの程度に、又如何に紹介せられて居るだらうと云ふ事である。で早速圖書課にある Wenckstern の Bibliography of Japan を繰つて書名を拾つたり、之に多少の新しい事實を加へたりして纏めて見たのが此小稿である。殆ど絶無と云つて差支ない程參考書に乏しい事と及び稿者に外國語の智識の貧弱な事（之は參考書以上に欠乏して居る）とは本稿をして辛うじて其一斑を傳へるに止まらしめた。之は謹め御詫び申して置く。唯諸君に此方面の概況を傳へ、兼ねて此二好著を御紹介する事が出來たならば稿者の目的は既に達せられたのである。

數年前澁川玄耳氏の新譯平家物語が出た時、某新聞の紹介欄に「軍記物の口譯」は之が最初の試みだと云ふ意味の賛辭があつた事を記憶して居る。處が同じ平家物語の口譯が、無論別種の目的ではあつたが、十六世紀即今を距る三百餘年前に、此九州の一角で出版せられ、而も其が近頃騒いで居るローマ字で――之も目的を異にしては居る――組まれたと云ふ事は一寸面白い。標題は「日本のことばとイストリヤを習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和らげたる平家の物語」と云ふ長いもので、實に天正二十年（一五九五）の出版に係り、現に倫敦の大英博物館の珍藏になつて居るさうである。新村博士の南蠻記によると該書はファビアンと云ふ者が、天草の切支丹の學校に於て、宣教師等に日本語を教授する目的で作つた一種の教科書で、著者は最初惠俊と稱した加賀の禪僧ださうである。成程原文の抄を讀むと、何處かに當時の五山の禪僧が著した抄物類の口吻に似た處がある。更に西譯を添へて原文と對照してあつたならと思はれるが其は無い。併し兎に角、

宣教師達が之を讀んだのは確であるから、今日知り得る範圍では此天草版平家物語などが歐洲人に我文學を紹介した最初だと云つて差支あるまい。之と前後して、長崎、加津佐、又は同じ天草などで、多數の宗教書語學書が出版せられた。慶長八年の日本辞書、(所謂伴天連衆即ち時の宣教師連の手に編纂せられたものといふ)同十三年の日本文典(ロドリゲーズ著)など最も有名である。其他文學の部類に數へ得るもの(假令目的は異なつて居たにせよ)としては前記平家の外に、「過ては改むるに憚る勿れ」「朝に道を聞いて夕に死すとも可也」などの短句を集めた「金句集」と、西文移植の嚆矢として知られた所謂文祿本伊曾保物語位であらうか。尙當時のジエスイト教會版の中には太平記抄などの名も見ゐるが、之はローマ字でなく日本字で(恐らくは邦人の爲に)印行したのである。又上述語學書類の中にも多少の國文學を包含して居た事は後の解題類によつても窺はれるが、之等はすべて國文學紹介といふ方面から觀れば前記平家物語程に重要ではない。

誰でも、是等の書目を通覽して先づ氣附くのは、總てが當時の所謂切支丹宗門と關係して居る事であらう。宗教書が過半を占め、自餘の語學教本類も畢竟宣教の目的で編纂せられたに過ぎない。出版もコレジョ(Collegio)即學林の事業である。從つて之に續く鎖國の時代、踏繪や寺請證文と云ふ責道具まで使つて、少くとも西教そのものと緣を斷たうと苦心した時代に、獨り此文學移植の方面のみが賑はう筈は無かつた。現に書目類を繰つて見ても、寛永以降明治維新に至る二世紀の間は實に寂寥たるものである。此間に唯一つケムフエル(Engelbert Kaempfer)博士の日本研究を忘れてはならぬ。ショイヒツエル(J. G. Scheuchzer)の傳に據ると博士は、一六五一年(慶安四)獨に生れ、長じて北歐の諸大學で科學、哲學、語學などを勉强し、後瑞典の

恙遣使に伴うて、初めて波斯に來たが、珍奇な東洋の風物に刺激せられた彼の好奇心は、更に東へ、東へと彼を誘つた。自記に徴すると、元祿三年（一六九〇）七月、彼は遂にシャムを立つて遙々極東に志した。途中幾多の危難を切り拔けて、漸くにして長崎港内に『神明の加護を謝し』つゝ投錨したのは實に同年九月二十二日の夜であつた。爾來二年間の滯留（其間に江戸表に下つて將軍に謁する事二回）は彼に豐富な資料を給した。當時の見聞錄と蒐集標本とは、彼の歿後、英のハンススローン（Sir Hans Sloan）邸に珍藏せられて居たのを一七二七（我享保十二）スウイス出の前記ショイヒツエル氏が英譯して、はじめて出版した。有名な The History of Japan である。（其再版本は學校にもある）。博士か小規模ながら兎に角當時爛熟の域に達して居た我が元祿文明に逢着したのは面白い。文藝の方では、丁度大阪の竹本座が天才近松名人義大夫の提携によつて連年の大入を占め、浮世双子が西鶴の才筆を載せて飛ぶ樣に賣れて行つた頃であらう。彼の蕉翁が

馬にねて殘夢月遠し茶の煙　（さよの中山にて）

宿かして名を名乘らする時雨かな　（島田）

などの句にしみ〴〵と旅愁を味ひながら幾度か往來した同じ東海道の而も同じ頃を此異國の旅人は評して如何に多數の人々が東海道を旅するかは殆ど想像の外にあり。其賑かなる事、日によりては歐に於ける最も繁華なる都市の大通にも勝れり、是れ余が往復四回の經驗によりて讀者に保證し得る所なり（三三〇頁）などゝ云つて居る。以上博士に就いて多言を費したのは、必しも彼の日本研究が間接に國文學に對する歐人の興味を誘つたためばかりではない。博士が、直接我鎖國時代を代表する殆ど唯一の國文學紹介者だつたからである。尤も彼は教會の人々の樣に、一々ローマ字に改めて出版するなどの勞はとらなかつた。（島原記

大阪物語等の翻譯はあつたかも知れないけれども。）唯歸國に際して數種の刊本を其儘本國に齎したと云ふに過ぎないが、觀方によつては宗教上の意味を伴はない丈け、却て眞の紹介に一歩近づいたとも云はれる。幸にしてショイヒツエル氏の日本史序文には此不思議な運命を持つた書籍の目錄と、其に對する簡單な解說とが附加せられて居る。多少共文學に關係のあるものを擧げて見ると、（ローマ字で出て居るのを漢字に復したのだ中には轉訛らしいのもあるそれは括孤で原綴を示して置く）

太平記、平家物語、（Feeki mono Gattari）大阪物語、島原記、神代記、天神記、本朝櫻陰比事、徒然草（Tsured sure Joshidano Kenko）百人一首（Faku nin Isju）伊勢物語、史記（Sikki）訓蒙圖彙、道中記（Dodsutski）

雜然たるものではあるが面白い。發賣禁止翁西鶴が雙岡の風流法師と異鄕の書架に肩を並べて居るなども珍である。解說も面白い。徒然草の著者に關しては簡單な、併し比較的事實に近い說明をして居る。之等が徒然草紹介の最初では無からうか。太平記を「源平二族の合戰を叙し平民の殁落に終る」などゝしたのは明かに平家物語と混線したので、如何にも有りさうな事である。又大阪物語と島原記とにはケ博士の譯があるとショ氏は斷つて居るが、二書の解說が他に比して稍詳細であり、誤謬も無い處より推せば恐らく事實であらうか。要するに文學上の產物は、各種の他の藝術と共に博士の日本研究中で最も閑却せられて居たに係らず、（浩澣な日本史中此方面の纏つた記述は殆ど一もない）猶且つ此時代としては注目に値する程の紹介を受けたと云はねばならぬ。

以上は明治以前の大要である。けれども、國文學に關する眞の研究乃至紹介と稱し得るものがあらはれた

のは無論明治以後に屬する。之は誰にも想像がつく。併し其等の具体的事實に至つては一寸見當がつき兼ねるだらうと思ふ。其邊の事情をも少し明にしたい。以下大体、一、どんな人々によつて、二、どんな機關によつて、三、どんな種類の文學が、紹介せられたかを略説して行く積りである。

(一)單に國文學に關する何かを西の國々に齎したと云ふ丈けならば、ウェ氏の書目からも、優に七十以上の頭數を得る事が出來る。併し之は卑近な雜誌の一投書子をも籠めての話で、今更一々其等の人々の身許を調べるにも及ぶまいと思ふが、中にどうしても忘れてならぬ人が數名ある。

フイツツマイヤー(Pfizmaier, A.)氏は弘化四年から明治十八年前後迄殆ど四十年に亘つて多數の研究と紹介とを發表して居る。語學の方面にも重要な研究があるらしいが之は本稿の主題を離れるから省き、文學の方面で主要なものを擧げると、柳亭種彦の浮世形六枚屏風は Sechs Wandschirme in Gestalten der Vergaenglichen Welt 枕草子は Das Plasterschreibebuch 一名 Farno akebono となり(一名は可笑しいが、之は季吟の注釋春曙抄を手に入れ、一方、本文の冒頭に春はあけぼのゝ句があるところから、徒然草の例にならつて是も枕草子そのものゝ異名だと考へたのであらうか)萬葉集は態々 Jorodzufano atsume などゝ別稱を附して居る。其他和泉式部日記、新著聞集、太平記、扶桑拾葉集、家集等すべて十種に餘つて居るが、多くは斷片でなければ、筋の紹介に止つて居る樣である。今左に氏の萬葉集の翻譯振りを紹介する、

千鳥啼く佐保の河瀨のさゞれ浪、止む時もなし吾戀ふらくに

Der Brach vogel singt! Die kleinen Wellen der Stromschnelle des Flusses Sawo stehen still zu kainer Zeit,

wie ich es liebe.

來むと云ふも來ぬ時あるを來じといふを來むとは待たじ來じといふものを。

Man sagt, dass man kommen wird, es ist die Zeit, woman nicht kommt. Man sagt, dass man nicht kommt, man wird kommen, und man erwartet es nicht. O sagen, dass man nicht kommt!

いづれも、歌の意味がまだよく會得されて居ない。前者は云ふまでもなく、女が或男を思慕して居る戀歌で「千鳥なく」は佐保の河瀨を修飾した句、又さゞれ浪までが「止む時もなし」を導く爲の序であるのに、譯歌では序の部分を中心とした叙景詩になつて居る。後者にしても原歌と譯歌と全然意味を異にして居る事は明白である。フイッツマイヤー氏は當時の日本文學通を以て人も容し自らも任じて居た人で、日本文の評論や小說の作さへあるさうた。其氏にして猶この程度だとすれば、當時の他の紹介と云ひ翻譯と云つた種類のものがどんな有樣であつたかは略想見するに難くない。併し氏の諸研究も亦十分に尊敬する價値はある、後年の立派な諸研究も其多數は恐らく直接間接に之等の研究に刺激せられて出來たのであらうと思はれるから。

アストン(Aston W. G.)とチエムブレン(Chamberlain, B. H.) ア氏は官命を帶びて、チ氏は我帝大の聘によつて、共に久しく我國に滯留して傍日本研究の各方面に多大の貢献をなした人である。文學の方でも二氏の力に待つ處は頗る多かつた。ア氏には有名な日本文學史がある。一九〇七年に世界文學小史と云ふ叢書の第六卷として出版せられたもので芝野六輔氏の邦譯も出來て居る。固より概說に過ぎないもので、引用文が徒らに多い憾はある(方丈記などは原書の殆ど半分を例證して居る)が紹介風の文學史としては之も適當の處置と云はねばなるまい。尙亞細亞協會の報告第三卷に載つて居る氏の論文 An Ancient Japanese Classic. と云ふ

のは主佐日記の紹介だけだが稿者は未見である。

チ氏には The Classical Poetry of the Japanese (1880, Trüebner's Oriental series) 英譯古事記（後出亞細亞協會の增刊）等が最も注目すべきもので、前者は物語歌、戀歌、挽歌、雜歌など〻部類を分けて萬葉集を、又「拔萃」と題して謠曲、狂言を、いづれも抄譯したもので、別に三十余頁の序文、作者傳等を附した親切な紹介である。譯文も前記フイッツマイヤー氏のに比べると遙に優れて居る。古事記はフロレンツ氏の日本紀獨譯と共に最も尊敬すべき代表的勞作である。チ氏には其他「和莊兵衛」や大和物語のうなび乙女の傳說や又芭蕉の俳句などの紹介があるがいづれも短いものである。

フロレンツ博士(Florenz, K.) 文科大學の敎授として多年東京に住んで獨逸語敎授の傍日本の歷史文學の移植に熱中して居た人で其功によつて文學博士を授けられた。西人で我國の學位を持つて居る人は多分氏一人であらう。數ある研究の中で先づ注目すべきものは其日本文學史 (Geschichte der Japanischen Litteretur, 1906) であらうか。六二六頁の大冊で、アストン同樣引用文で可也賑かにされては居るけれども、凡そ國文學史上大きな作品乃至事件は先づ遺漏なく、又誤謬もなく說明してある樣である。所說は多く、其序文に擧げて居る芳賀博士の國文學史十講をはじめとして邦文の文學史などに負うて居るらしく見ゐる。之は本書の長所で又同時に短所であらう、かう云ふ態度は不十分な國語の智識を眼鏡にして見當違ひの妄斷を受ける危險も無い代りに、從來の文學史に見ゐない樣な創見を期待する事も出來ない。部分的に多少の例外はあるが概しては、國文學の紹介といふよりも寧ろ國文學史の紹介に近い。とは云へ之等は眞に望蜀の沙汰で、說明の詳細な點に於いて、又好奇心以外文學としての價値を認めた點に於いて、疑もなく、國文學紹介の歷

史の上に一期を劃した好著と稱する事が出來る。それに本書の出版が日露戰役の間際であつた事も其効果の上に多大の關係があつたに相異ない。其他、氏には、獨逸東亞協會出版に係る日本紀の譯があり、又布目紙の和綴といふ凝つた裝釘で、萬葉、古今等の長短歌集、淨瑠璃寺小屋、孝女白菊の歌等が出て居る。

小泉八雲(Hearu, L.)氏に關しては、其詳傳「小泉八雲」(田部隆次著)が出版され圖書課にもあるから、今更繰り返すにも及ぶまい。氏の名は日本文學の紹介者と云ふよりも、寧ろ純粹の文學者として彼地に相應の地位を占めて居るといふ事である。氏は到底學者肌の人ではなく、矢張り多量の浪漫的素質を持つて居た人らしく思はれる。文章の巧拙は固より稿者にはわからないが、數ある國々の翻譯中讀んで最も面白いのは氏の筆である。今昔物語の抄譯などは確かに原文よりも潤澤がある樣に思ふ。其代りそれ丈け原文から離れても居る。所謂自由譯程度のものが一番多い樣である。それから氏が其厭人間的な陰氣な性情から、丁度同じ傾向を持つた所謂怪談物に深い興味を感じた事は他の人々と趣を異にした點である。

其他、Dicking, Valenziani, Lange, Rosuy, Severini 等英、佛、獨、伊の人々が或は單行本として或は雜誌稿として多くの勞作を發表して居るが單に國文學紹介といふ狹い範圍では上述數氏程に大きな仕事はして居ない。

(二)、極東主として日本に關する研究機關の成立したのは、矢張我開國以後に屬するらしい。中で一番重要なのが

1. Asiatic Socteiy of Japan (英)

で之に次で

2. Deutsche Gesellschaft fur Natur und Volkerkunde Ost Asians. (獨)

佛、伊にも丁度之に相應する會が組織せられて居る。

1. はどんな會かと云ふに、會の目的は其會則によると「日本及び他の亞細亞諸國に關する事項の報告を蒐集且つ出版する」にあつて、其爲に毎年例會を開き、又一冊乃至數冊の報告を出版して居る。本稿の各處に例證した研究の中で該誌上で公にせられた分も決して少くない。尙同會の經過に就ては丁度昨年の同會の報告に載つて居る Mac Cauley 博士の演說筆記によつて大体を知る事が出來る。之に從ふと明治五年横濱に創立せられ、後東京に移轉し、東京帝國大學、築地の敎會等數次の變遷を經て現今は慶應大學圖書館内にある。會の事業の方面にも矢張り相應の盛衰を免れなかつた。マ氏の話によると、最初の十二年が非常に活氣があつて代表的の日本研究者（マ氏はNihonologue と稱して可也と云つて居る）Satow, Griffis 等十數氏が多數該博な研究を寄せて居る。爾後數年の不振時代を經て明治二十三年から六ケ年程は前記チエムブレン、アストン兩氏が中心になつて、目覺しい活況を呈し、殊に歷史(法律、文學、宗敎)の方面に最も貴重な論文が出た。此數年と最近の四年間が會の最盛期であるとマ氏は說明して居る。同會は數年前、多數の題項を提供して其等の研究を募つた事があつた。不完全な稿者の備忘に從ふと其中には近松、うつぼ、盛衰記、平家、太平記江戸時代小說家、貝原益軒、室鳩巢等の名があつた。尤も其等は今日迄には一も發表せられて居ない。

獨、佛、伊等の會に就ても、稿者は誠に不案内であるが、其機關誌の目錄などから推せば、略之に類似の會であるらしく思はれる。そして文學方面の紹介も亦之等の諸國の會に負ふ所が多いのは自然の事である。

(三、どんな種類の文學が最も多く傳へられたかと云ふ事は、若し材料さへ十分ならば、直ちに何處に東西趣味(文學上の)の一致があるかといふ問題に關係して來る筈であるが、稿者の求め得た數は合計百五十種に足らぬ程であるから、遺憾ながら此處迄立入つて考察する事は出來ない。以下唯正直に事實を列擧した迄である。

從來多少共紹介せられた文學は、時代から云ふと上古から中古、近世を經て最近世迄、種類にすると、歴史、物語、軍記物、謠曲、狂言、戯曲(淨瑠璃)假名草紙類、讀み本、隨筆、雜纂等より和歌、俳句新体詩に至る殆どすべての主要方面を網羅して居る。中で、最も多いのが、散文では近世即江戸時代で、殊に作者としては柳亭種彦、題材としては義士關係のものである。義士は義人錄、義士傳一夕話、假名手本忠臣藏、いろは文庫等種々の方面から諸國語に紹介せられ、其數はウェ氏の書目丈けでも十種に餘つて居る。之は恐らく例の武士道やハラキリと關聯してこんな大人氣を博したのであらうが、一方には忠臣藏が多年我劇壇唯一の寵兒となつて居たと云ふ事情も預つて力がある。近松、西鶴が殆ど顧みられないで、却つて種考、馬琴が多數紹介せられたのも實はそれ等の作の內容性質に關係があるのではなく、唯江戸の末から明治の初年へかけて草雙紙讀本の類が我國一般の家庭に最も廣く普及して居たといふ事情に基づくであらう。

和歌の方は萬葉集と百人一首が一番人氣がある。萬葉が選ばれた譯は、前述の國民一般の流行を云ふ側からは說明が出來ないが、之は恐らく、古今以下の歌が繁瑣な技巧(殊に掛詞、緣語、序詞、等國語特有の)に遮られて、了解並びに翻譯が困難であるに比べて、萬葉の歌は素朴單純で辭書に賴りさへすれば容易に領得する事が出來るからであらうか。之は例へばヂッキンスの Japanese Text の樣な一書に各代の歌を網羅した

ものが萬事に成功しても、古今以下に不成功(佐々博士の評)であつたに徴してもわかると思ふ。

以上は日本文學紹介の一斑である。尤も順序としてこゝに輓近の事情を明にするのが至當であるが、生憎之等に關する確實な參考書類がいかにも乏しいので、慾に誤聞や憶說混りの漫然たる消息を列べる事を控へて、直ちに、此方面最近の代表作とも稱すべき前記ポーター氏の好著に對して紹介旁簡單な感想を述べて筆を擱かうと思ふ。

稿者は多大の興味を以て、ポーター氏の英譯徒然草及び土佐日記を讀んだ。すべて外國語に翻譯せられた祖國の文學を讀むと云ふ事は、其原書の文學上の價値如何に係らず、誠に愉快な事である。殊に翻譯の態度に單なる好奇心に驅られたと云ふ以外に、更に深い感興と眞摯とを認めた時程、嬉しくもまた懷しい事はあるまい。二書を讀んだ場合が正にそれであつた。

凡そ他國の文學を移植紹介する場合、其人に必然に欠けてはならぬ二條件がある。一には之を了解するに十分な(少くとも必要な)豫備智識を持つ事、二には、之を愛好(或は更に廣く同情)する事である。

氏が國文學に造詣の深い事は、土佐日記の序文で十分に窺はれる。該序文は此簡素な、併し捨て難い一記錄を讀むに必要な豫備智識を網羅して居る。それは假令邦人が書いても其以上に多く語る事はあるまいと思はれる程行き届いたものである。徒然草の方には、其緒言に伊藤平章氏の徒然草講義や內海弘藏氏の同評釋を參考とした由が記してある。之によつても氏の智識が如何に確實なものであるかは解る。又氏が日本文學の愛好者である事は、今更贅說を要しない。即ち氏は完全に前記の二條件を具備した、日本文學の紹介者であ

ると云ふ事が出來る。

勿論、一々原書と對照して、細かに穿索すれば、些細な單語の意味や、例の語句の上の洒落や、又は紆曲した語法の解釋の上に多少の誤謬は免れない樣である。併しどんな優れた翻譯でも絶對の完全といふ事は殆ど期し難い上に、本書の樣に、古語に充ち滿ちて、其國民にさへも注釋なしには讀まれないと云ふ樣な場合には、此位の事は寧ろ當然の事である。加之邦人でも誤り易い古語が美事に移されて居る個所も決して少くない。例へば、「いみじ」などゝ云ふ、それ〴〵意味を補足しなければならぬ形容詞なども、毎に正確に譯されて居る樣であるし、又徒然草の遁世生活を嘆美して居る節の「まつこともなく云々」を「まつ」の普通の意味に拘泥しないでWithont any human desires とし、法師共が破籠を紅葉の下に埋めて失敗する條に「いたくこそ困じにけれ」を困る意にせずして How very tired we are ! とし、土佐日記の當時の方言「まからず」を打消にせず肯定にしてあるなどの手際は至る所に求められる。それから原文の語法乃至文勢を成るべく保存しようと云ふ苦心も、隨所に看取せられる事であるが、殊に短歌の場合に顯著であり、又それ丈け成功して居る樣に思ふ。律語的に又暗示的な短歌を譯すると云ふ事は、氏も序文に一言せられた通り實に至難の事に屬する。時としては全く絶望しなければならぬかも知れぬ。併し多くの場合は或程度迄傳へ得る筈であり、從てこゝに苦心の余地も生ずるのであらう。野口米次郎氏は其日本詩歌論で、俳句の英譯に就て、「朝顏に釣瓶とられて貰ひ水」を

The morning glory
Her leaves and buds has bound

My bucket handle round,
I could not break the bands,
Of these soft hands.
The bucket and the well to her left,
'Let me some water, for I come bereft'

としたのを斥けて

The well-bucket taken away
By the morning glory ——
Alas water to beg !

で澤山だと云つて居る。此説明し過ぎると云ふ弊は短歌の方面でも常に見受ける所であつて、之では、到底意味の説明に墮ちざるを得ない。宣長が初學者の爲に古今集を俗解して遠鏡を著した。多數の紹介者の中には、古今集の和歌を傳へた積りで、其實遠鏡を紹介して居る人が少くない。例へば

君が爲春の野に出で、若菜摘む、わがころもでに雪は降りつゝ。

を

Ich habe für dich, du Liebste,
Mich hundertmal gebückt
Und lächelnd der Wakana

Schimmernde Blüte gepflückt.
Und ist doch noch kein Frühling !
Kein Grün sonst weit und breit :
Der Wind zog über die Felder,
Und Schnee fiel auf mein Kleid .....

P. Enderling, Japanische Novellen und Gedichte.

とする樣なものである。譯詩の心持は原歌には無論ある。併し其は言外に遺された聯想であつて、詞から此聯想へ誘はれて行く過程が和歌(といふよりも寧ろ短い形式のすべての文學、警句などをも籠めて、)に共通な感興の一要素ではなからうか。そして此聯想は、必しも國語を換へる事によつて全然阻害されるとは限らない。譯者は此大切な一要素の保存を閑却して居る。前に說明し過ぎると云つたのは此點である(尙之等の考の詳細は枝葉に亘るから省く。)所がポーター氏の短歌の取扱ひ方には更に此弊がない。殊に歌の上下の句切を認めて、最後の二行に脚韻を置く事によつて之を表はさうと努められたなどは、稿者は初めて見た事で誠に面白い試と思つた。例へば。

都出でゝ君に逢はんと來しものを、來しかひもなくわかれぬるかな。

From the Capital.....(5syl.)
Far across the sea I came, (7)
Came to see my Lord, (5)

But alas I was born in vain.
For we now must part again.

散文にも隨所に此態度が認められる樣である。

要するに、二書は、理解と同情とに富んだ近來の好著であつて、殊に國文學を泰西の人々に紹介する上に多大の効果があつたであらうと信ずる。曩に小泉八雲氏を迎へた本校が、今又ポーター氏を迎へる事を得たのは誠に光榮である。吾人は氏がこの黑髮村――一千年前の歌物語によつてやさしくも名づけられた黑髮村――に於いて、今後、日本文學の各方面に益々其研究と鑑賞とを進め行かれん事を切望するものである。妄言多罪。